

『地の底も御手の内に』 牧師 柏 明史

昨年8月5日に起きた、チリ、サンホセ鉱山の落盤事故。33名の作業員が、地下700メートルの坑道に閉じ込められました。当初、生存は絶望視されていましたが、事故から12日後に、全員が無事であることが確認されました。30度を超す暑さと、90%を超える湿気と暗闇。飢えと、しのびよる死の恐怖の中で、彼らは苛立ち、しばしば仲間内で争いあいました。しかし、小さな争いはあっても、彼らは全体としての統制を失うことはなかったのです。

彼らの生活ぶりを知ったある精神科の医者は、こう言っています。「この人たちは、極限状態にあっても、お互いに助け合い、励まし合って、困難に対処している。このような状態で、どうしてこのように行動できたのか、不思議だ。これは奇跡と言っても良い。」実は、彼らが、このような極限状態の中でも、統制のとれた生活をするのが出来たのには、理由があったのです。それは、彼らが、毎日昼の12時と、夕方の6時に守っていた礼拝と祈りでした。

彼らは坑道内に礼拝所を設け、そこで毎日礼拝し、祈りを献げていたのです。後に地上とのパイプが通じた時、彼らは、生活必需品と共に、聖書と聖像と音楽プレーヤーを送ってくれるように頼みました。

この時、聖書を送ったのは、チリのキャンパス・クルセード・フォー・クライストの人々でした。また、鉱夫たちは、一人一人にロザリオを送って欲しい、と依頼しました。彼らの要望に応じて、ローマ法王ベネディクト十六世は、チリの枢機卿に指示して、ロザリオを彼らに届けさせました。地上から送られてきた聖像を礼拝所に掲げ、送られた聖書と音楽プレーヤーを用い、ロザリオを手にして、彼らは礼拝したのです。そのような彼らに、地上からも様々な励ましのメッセージが届けられました。「主イエスは暗い洞穴の墓から、岩を動かして復活した」。この言葉が、彼らを励ましました。また、主イエスは、十字架に架けられ、復活された時、33歳であったとされている事と、彼らの人数が33人であることも、彼らを力づけました。このような純粋な信仰と、礼拝・祈禱会が、毎日欠か

さず続けられたことが、彼らの中に、奇跡とも思える統制を可能にしたのだと思います。更に、神様のなさることは私たちの思いを超えて素晴らしかったのです。何と彼らの中に牧師がいたのです。ホセ・エンリケスという54歳の男性は、その時は鉱山で働いていましたが、元々は牧師だったのです。このエンリケスさんが、日々の祈禱を導いていったのです。エンリケスさんは、地上との交信が出来るようになった時、家族にこのようなメッセージを届けています。「私は大丈夫です。なぜなら、主イエスが私の内に生きてくださるから。」そして、彼は、地下700メートルの坑道にあって、この御言葉が与えられたと伝えていきます。それは、詩編95編4節の御言葉でした。「深い地の底も御手の内にあり、山々の頂も主のもの」。10月13日、最初の被災者が救出され、やがて全員が地上に出ることができました。救出された時、彼らは緑色のつなぎを着ていましたが、その上か、下にTシャツを着て出てきました。そのTシャツは、エンリケスさんからの依頼で、キャンパス・クルセードの人たちが作成したものでした。

Tシャツの左の腕には「Jesus」、正面にはスペイン語と英語で、「主よ感謝します」、そして背中には詩編95編4節の御言葉、「深い地の底も御手の内にあり、山々の頂も主のもの」、と書かれていました。救出された人が、真っ先に、神様に感謝の祈りを献げる姿は、世界中に伝えられ大きな感動を呼びました。最後に救出された人が、地上に上った時、チリの国家が歌われました。すると、この時、未だ地下に残っていた救助隊の人の耳に、その歌声が聞こえたそうです。不思議なことに、700メートルも上の、地上で歌われた歌声が聞こえた救助隊員は、それを聞いて、ものすごく感動したそうです。

私は、このエピソードを聞いて、これが、逆さまであっても良いな、と思いました。私たちが、地上で心を込めて献げる賛美が、天の神様に届くと素晴らしいなと思いました。いえ、必ず届きます。今年もまた、清水ヶ丘教会では、全員が一人の人のようになって、主を称える歌声を、高らかに歌っていきたいと思います。主の恵みに感謝し。心からの喜びをもって、賛美を献げていきたいと思います。主は、その歌声を喜んで聞いてくださると信じます。